

処であつたようだ。明治初年の病院は国公立、私立を合せ百に満たないが、細菌学の勃興と共に必要に迫られた傷病人の収容施設であり、伝研はその時流にのつた花形役者であつたらう。一匹狼の俊秀が集まるのも無理はないが、その組織作りは容易でなかつたらう。

学者も人間だ。学問も変転するが、人間模様も躍動している。功をあせて確証もないまま発表したり、間違ひだつたと判つても一門の名譽の為に容易に認めないとか、外野席からみると面白い。人間集団である以上、人間力学も避けられぬ。それが史学の面白い処でもある。多数の意見に基づいて、筆をおさえた公正な評価でありながら、人物が躍動しているのは著者の文筆力。また時代が要求したのであろうが、登場人物も今より一段とスケールが大きい。組織の長としていつも考えさせられることは、波風たてず万事人の和を重んずる方と一将功成り万骨枯るゲンコツ型のあることで、本書に現れる指導統率者にも色々と教えられることが多い。本書にキイ・ワードをつければ医学、伝染病、研究所、学者であらうが評者はこれに人物像を入れない。それ程に面白い。広く好学の士に御一読をすすめる所以である。

評者は昭和六十一年の停年まで五、六年間縁あつて医科研の非常勤講師を命ぜられ、多少この館に出入りもし、出張先として外科の若い人達を預かつたこともある。また登場人物も田宮猛雄を始め、本書の後半には自分の眼でみ、聲咳に接し、また教えを受けた方々が現れるので巻をおく能わず、一

気に読み通した。評者も歴史上の人物になれるわけではないが、歴史上の人物に近づきつつあると苦笑せざるを得なかつた。

(高橋 勝三)

〔学会出版センター・東京都文京区本郷六―一〇、☎〇三・三八一四・二〇〇一、一九九二年刊、四六判五五〇頁、四八〇〇頁〕

トーマス・マキューン著、酒井シツ・田中靖夫訳

『病気の起源』

この本は、英国のバーミンガム大学の社会医学担当名誉教授であつたトーマス・マキューン博士が、一九八八年に出版したものゝ翻訳である。なお著者は出版の数カ月前に死去した。

著者は、あまり例を見ないユニークな切り口で、人間の病気の直接的原因 (cause) ではなく起源論 (origin) を展開し、人間の目指すべき方向や健康のあり方を提起している。

著者は人間の歴史を、狩猟・採集時代、農耕時代、工業時代の三期に分け、各時代における人間の生活条件と人口の変動との相互関係から、不健康の原因として食糧不足による栄養問題に特に注目する。即ち、狩猟・採集時代に死亡率が高く寿命が短かつたのは食糧不足のためだと論じ、農耕時代では密集した大集団を維持するために定住化による農業の導入が不可欠であり、その結果食糧の供給量が増えて人口も増加した。しかしながら、家畜や他の動物と一体となつて不潔

な集団生活を送ることによる感染機会の増加から、感染症が主な死亡原因になったと論じている。

更に工業時代に入ったここ三世紀間の急激な人口増加の原因は、死亡率特に感染症による死亡率の低下にあるとした。その理由として、農業生産の上昇による栄養状態の改善の結果としての抵抗力の増加と、水道・食品管理などの衛生設備の向上による感染機会の減少を挙げているが、その一方で健康改善の代償として、がんや心臓病などの非伝染性疾患が増加し、現在に至っていると述べている。

著者は、精神の病気を除く様々な人間の病気を、出生前の受胎成立時点や胎生初期に起源のある遺伝病、十分な食糧が食べられないことに起源する貧しさ病、食糧は十分なのに公害など生活環境が悪化したことによる健康への危害や、喫煙・飲酒・運動不足といった生活習慣に起源する非伝染性疾患である豊かさ病に分類し、その制御の処方箋を述べている。

要するにこの本のおもしろさは、病気の起源を医学用語でも専門用語でもない、しかも相対立する概念である「貧しさ」と「豊かさ」で分類したということにある。しかしながら、その言葉の持つ経済学的意味からの分析が重ねられていないために、医学以外の領域からの評価が気になるところでもある。

(網野 豊)

(朝倉書店・東京都新宿区新小川町六一二九、☎〇三・三二六〇・〇一四一、一九九二年十月刊、A5判、二二六頁、三七〇八円)

吉田直哉著

『私伝・吉田富三 癌細胞はこう語った』

故吉田富三教授の長男、吉田直哉氏(武蔵野美術大学教授)による吉田富三伝である。

以下、「吉田教授」と書くのは、お父さんの方、つまり富三先生のことである。

本書を知ったのは、並木恒夫博士(国立仙台病院)が年賀状(一九九三年)で「十二月に吉田富三先生の伝記を二冊よみ、大変感激した」と教えてくれたからである。私はかれに葉書を出して書名を尋ね、かれは、本書と永田孝一「吉田富三伝、流動する癌細胞」(講談社)をあげて、さらに北村四郎「激動の中を生きて」(考古堂書店)もぜひ読むようにとすすめてくれた。

私は読書家ではないので、三冊も教わってひどく大儀になったが、とにかく買っておくことにした。そこへちょうど、医史学会から本書の書評を求められたのである。

本は学会が貸して下さったが、その本には吉田教授の郷里、福島県浅川町の町長さんの手紙がついていた。それによると、浅川町では「ふるさと創生事業として吉田富三博士の顕彰事業を推進しており」、その内容は、記念館の建設、がん撲滅運動など、「この伝記もその一環として発刊された」とある。

「創作と創造はちがう」と著者に父・富三氏が語るところがあるが(二〇一頁)、平成の世に「創生」という言葉が使われ、